掲載許可番号：d20250514-06

２０２４年10月31日、宇和島市指定有形文化財の毛利家での彫刻展搬入の日は大雨になりました。バケツをひっくり返したような激しい雨が降りしきる中、ワンボックスカーに作品を積んだまま、私はワイパーを激しく動かしながらどうしたものかと途方に暮れていました。しかし荷下ろしの時間が近づくと、奇跡のように雨がやんで、搬入・設置作業を行うことができました。

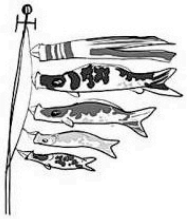
毛利家は道路から細い道を少し上った小高い場所に山を背にして立っています。先刻まで降った大雨のため、ごうごうと道にも雨水が流れ出すありさまでした。搬入作業では道路そばの駐車場に搬入車両を止めましたが、細い上り坂は軽トラックを使わないと屋敷に近づくことができません。ここでは前回ご紹介した「旧庄屋毛利家を守る会」の有志の皆さまが車を出して手伝ってくださいました。

立派な門をくぐると、中庭の奥に茅葺（かやぶ）きの大きな屋根が見えます。雨のため庭は水浸しでしたが、玄関に入ると土間があり、ひんやりした空気に包まれます。土間はかまどのある炊事場に続いており、囲炉裏（いろり）のある部屋と土間は目の細かい柵のような壁で仕切られていて、外から来た人はいろりの空間は見えませんが、中にいる人は訪問者が誰なのか分かるようになっていました。

毛利家での展示（2）

帳簿を付ける小さな部屋を右手に見ながら玄関先で履物を脱ぎ上がると、庭に面した広い客間があります。庭から上がるようになっている勝手口もあり、昔は職業や身分の違いによって家への入り方も異なっていたと分かります。客間から家族の居間、奥の広い座敷に至るまで多くの部屋に分かれています。

裏には山があり、建物全体は庭を囲んだ鍵形になっていました。太陽の光は朝から庭と家に差し込み、昼ごろまで部屋を明るくしますが、昼を過ぎ15時を回るころには午後の日は裏山に遮られて届かなくなり、家の中は薄暗くなります。それと同時に気温も下がってきます。このように自然の地形をうまく使い、太陽と共に暮らすようになっている家でした。土台に石を使い、木と土と紙と茅によって造られた伝統的な建築の毛利家では、一日の間での気温の変化も大きく感じられました。



展示期間中にかつてここにお住まいであったという方から、とにかく寒かったと伺いました。私が毛利家に来て最も心引かれたのは、人間の生活と、自然の領域との接点が近いと感じたことです。建物のすぐ裏にある山は、まさに自然の領域で、何かがいる気配を醸し出していました。畳を敷いて人が暮らす空間と、動物やその他のものたちの領域との境界が生活空間にとても近いところにあって、作品制作者の想像力をかき立てます。

（増本　達彦・松山東雲女子大教授・彫刻家〈Ｄｒｉｌｌ―ｍａｓｕｍｏｔｏ〉）